



芭蕉発句表現論 : 中国四言詩形による発句美的情緒の再現 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	胡 文海
発行年	2019-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第710号
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017025

[5]

氏名	胡 ^こ 文 ^{ぶん} 海 ^{かい}
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第258号
学位授与の日付	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	芭蕉発句表現論 —中国四言詩形による発句美的情緒の再現—
論文審査委員	主査教授 山本 卓 副査教授 田中 登 副査教授 長谷部 剛

論文内容の要旨

本論文は序論、第一章「芭蕉発句の中国語訳現状」、第二章「音声の翻訳」、第三章「芭蕉発句の切字」、第四章「季語の翻訳」、第五章「俳諧性の再現」、および結論からなる。第一章では中国における芭蕉発句翻訳論著を分析する。特に一九八〇年以降に代表的な発句翻訳者の実作を検討し、従来の翻訳作品の優れたところと足りないところについてくわしく検討する。

第二章では、従来の発句研究においてあまり問題にされてこなかった音声、あるいは音韻のことをめぐって、芭蕉発句における音声美について掘り下げる。「五七五」というリズムと四言詩の拍リズムの類似性、芭蕉句中における母音の重なり相通、連声などの美しさ、さらに繰り返し表現による音声の響などに関する検討を通し、翻訳する際、発句のリズムや音声美をどのように再現すればいいのかについて考察する。

第三章においては、芭蕉発句における切字の特徴について分析する。五七五という形で詠まれた発句というのはその表現の流れを切断するもの、すなわち切字を用いるものである。芭蕉の発句に多く用いられた「かな」「や」「体言止め」などの詠嘆のニュアンスを持つ言葉は音声上にしても、意味上にしても重要な役割を果たしているが、句の余韻も示唆している。従って、翻訳においては、これらの感嘆語の翻訳に対しても十分に吟味する必要がある。そこで四言詩に数多く用いられる語気助詞の深意や詩における役割について分析した上で、切字の訳し方を提示する。

第四章では、芭蕉発句における季語の中国語訳について述べる。俳諧に欠くことのできない要素、時として一句の基調を決定する季語の把握、運用がとりわけ大事にされている。季語は一句のなかに季節感を持ち込む媒介となるだけでなく、一句の美的情緒、根本精神も季語に凝縮されているといえよう。本章では、「花橘」と「梅」という二つの季語をもとに、季語に含蓄されている伝統的な本意に対し、芭蕉はどのように受け継ぎ、またどのよ

うに発展させたか、言い換えれば季語の俳諧的新意について分析する。

第五章では、俳諧の根底となる「滑稽性」の翻訳をめぐって検討する。発句に含まれる滑稽性は数多くの様相、もしくは意味内容を持っている。これによって、句の意味が広く、豊かになるのである。翻訳の段階においては、発句の根底ともなる滑稽性をどのように取り扱うべきかも肝心である。しかし、従来の翻訳作品においては形式などを中心に論争されているが、この滑稽性を話題にするのが極めて少ない。そこで本章では芭蕉発句における俳言「蚤、虱」およびオノマトペの特徴を考察し、四言詩の表現と比較しながら芭蕉俳諧性の翻訳を検討する。

論文審査結果の要旨

第二章では芭蕉発句研究であり問題とされてこなかったリズム感、音韻について、胡氏オリジナルな分析立論により、その中国語訳として中国四言詩の形式が最も相応しいものとされた点に審査員の注目が集まった。いろいろな意見が提示されたが、胡氏提案を積極的に支持、肯定する委員などいずれも胡氏案を諒とするものものであった。

第三章の切字の問題では、芭蕉発句における「体言止め」「や」は、ことばにならぬほどの感動や余韻や言い差しを表現しようとして使われるが、「哉で句を結ぶ」場合、詠嘆は句の終わりにあり、句の奥ゆかしさを存分に表現できる。従って、翻訳においては、これらの感嘆語の翻訳に対しても十分に吟味する必要がある。胡氏は四言詩に数多く用いられている語気助詞（たとえば「焉」「哉」など）の深意や詩における役割について分析され、発句の切字の中国語訳としてこれらが相応しいことを示された。するどい指摘である。第四章では芭蕉発句における季語の問題を吟味する。「花橘」「梅」という代表的な季語に注目し、まず伝統的和歌の用例を分析し、芭蕉がその伝統的本位を継承しつつ、自分なりに受け止め、ユニークに句に詠み込んでいることを解明している。芭蕉発句の季語を研究するにあたり、非常に代表的な二例だといえよう。これらの中国語訳として四言詩に多用された「疊語」を用い、原句の意味内容、余韻を保ちつつ、季語のニュアンスや本意を具現しようとしていると審査員の賞賛があった。

第五章は俳諧の根底となる「滑稽性」のその翻訳の問題である。漢詩の主流である五言詩は四言詩より詩歌の内容が大幅に豊かになり、表現する範囲も幅広くなった。五言詩は述懐や陳述に長じるのであるが、発句の滑稽性を弱めることは避けられない。そこで本章では芭蕉発句における俳言「蚤・虱」およびオノマトペの特徴を考察し、四言詩の表現と比較しながら芭蕉俳諧性の翻訳を試みた。胡氏の技量の発揮された一章である。

以上本論文では、俳文学全体（あるいは日本近世文学全体）にまで丁寧目配りして、芭蕉文学の全体像を明確化し、さらに芭蕉発句の研究を深め、また、発句の詩歌翻訳理論、芭蕉発句の特徴および芭蕉表現の斬新さなどを検討し、その上で、従来の翻訳の、優れて

いる点と足りない点を捉え、既存の芭蕉発句の中国語訳について検討を行いながら、音韻、季語、切字や俳諧性などの面から四言詩の形で芭蕉発句の翻訳を試みた。しかも、合理的な翻訳方法の提出ではなく、芭蕉発句の裏にある日本詩歌の深意、日中間の文化的相違に対する深い理解に基づいて、ようやくなしえたものであろうというのが審査委員の等しい意見であった。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。